

「春秋」とは何か(四)

高橋君平

公羊伝と穀梁伝

ここでは何休学(学は注述の意)の春秋公羊経伝解話と范寧集解の春秋穀梁伝を引く。原文は経伝を分けな
いし句読もない。

〔経〕は 経文。〔伝〕は伝文、訓点は筆者が補足したもの、() は筆者の訳語。

公羊伝隠公元年

〔経〕 元年春王正月

〔伝〕 元年者何、君之始年也。春者何、歳之始也。王者孰謂、謂文王也。(王とは誰のことを謂うのかとい
う問を出すから、文王を謂う也という答が出るが、この王は周王朝の暦の意であらう) 曷為先言王而後言正
月、王正月也。何言乎王正月、大一統也。公何以不立言即位、成公意也。何成乎公之意、公将平国而反三之
桓、曷為反三之桓、桓幼而貴、隱長而卑、其為尊卑也微、國人莫知、隱長而賢、諸大夫拔隱而立之、隱於是
焉而辭之、則未可知、桓之將必得立也。且如桓立則恐諸大夫之不能相幼君也、故凡隱之立為桓立也。隱長
又賢、何以不立、立適以長不立賢、立子以貴不立長。桓何以貴、母貴也。母貴則子何以貴。子以

母貴、母以_レ子貴

〔經〕三月公及_二邾婁儀父_一盟_二于昧_一。

〔伝〕及者何、與也。会及暨皆与也、曷為或言_レ会或言_レ暨。会猶最也、及猶_二波波_一也、暨猶_二暨暨_一也。及我欲_レ之、暨不_レ得_レ已也。儀父者何、邾婁之君也、何以名、字也。曷為称_レ字、褒_レ之也、曷為褒_レ之、為_二其与_レ公盟_一也。与公盟者衆也。曷為独褒_ニ乎此_一。因_二其可_レ褒而褒_レ之。此其為_レ可_レ褒奈何、漸進也。昧者何、地期也。
(昧は約束の地)

〔經〕夏五月鄭伯克_二段于鄆_一。

〔伝〕克_レ之者何、殺_レ之也。殺之則曷為謂之克、大_二鄭伯之惡_一也。曷為大鄭伯之惡、母欲_レ立_レ之、已殺_レ之、如勿_レ与而已矣。段者何、鄭伯之弟也。何以不称弟、当_レ国也。其地何、当_レ国也。齊人殺_ニ無知_一何、以_レ不_二地在_レ内也。在_レ内雖_レ当_レ国不_レ地也、不当_レ国雖_レ在外亦不_レ地也。(国主でなければ外国でも地名は言わない)

〔經〕秋七月天王使_二宰咺_一來_レ歸_二惠公仲子之賵_一。

〔伝〕宰者何、官也、咺者何、名也。曷為以官氏、宰士也。惠公者何、隱之考也、仲子者何、桓之母也。何以不称夫人、桓未_レ君也。賵者何、喪事有賵、賵者蓋_レ以_レ馬以_レ乘馬束帛、車馬曰賵、貨財曰賵、衣被曰襚、桓未君則諸侯曷為來賵_レ之、隱為桓立故以_レ桓母之喪_一告_ニ于諸侯_一、然則何言_レ爾、成_ニ公意_一也。其言_レ來何、不_レ及_レ事也、其言_ニ惠公仲子_一何、兼_レ之。兼之非礼也、何以不_レ言_レ及_二仲子_一、仲子微也。

〔經〕九月及_二宋人_一盟_二于宿_一。

〔伝〕孰及_レ之、内之微者也。

〔經〕冬十有二月祭伯來

〔伝〕祭伯者何、天子之大夫也。何以不_レ称_レ使、奔也。奔則曷為不_レ言_レ奔、王者無外、言_レ奔則有_レ外之辭也。

〔經〕 公子益師卒。

〔伝〕 何以不レ日、遠也孔子所不見所見異レ辭、所聞異レ辭、所伝聞異レ辭。 (見た場合と聞いた場合と、また聞きした場合は、それぞれ表現が同じでない。こんな所に孔子を引き出すとはどういう意味かさっぱり解らぬ)

以上が隠公元年の公羊経伝の全文である。公羊伝の特色は(一)伝文が冗慢である (二)問答形式に終始し、往々文法論(先言後言の類)を混じえる。(問答形式の解釈は僅かに大戴礼の夏小正に見えるだけ)

問 句 答 句

元トハシ年ヲ者ハ何ヲ。 君之始年 (伝なくとも誰にもわかる)

王者孰謂 謂フニ文王ニ也 (問い方の如何によって答句がちがってくる。僕らは「王」を周王朝の曆と解するから「文王」とは謂わない)

公何以不レ言ニ即位ニ 成スニ公意ニ也

儀父者何 邾婁之君也

何以名レ之 字也 (名ではなく字である)

曷ヲ為シ稱スレ字 褒ムレ之也

曷ヲ為シ褒ムレ之 為メニ其ノ与レ公盟ニ也

与公盟者衆也、褒為独褒乎此。(なぜ、これだけを褒めるのか) 因リテニ其ノ可キレ褒ム而シテ褒ムレ之

此其ノ為レ可キレ褒ム奈何 漸進也 (其の褒むべき点は何か、魯に好意的になつて来たから) ……

これらの伝文は、経文を読めるほどの者にはその意味はよく解る筈だから無用の駄弁のように思われる。次に文法に依る伝文を引いてその誤解を批判しておかねばならない。

〔經〕僖公十有六年春王正月戊申朔、隕石于宋五、是月六鵠退飛過宋都、(林羅山の訓点が「隕石アリ」とするのは妥当でない)

〔伝〕曷為先言隕而後言石、隕石記聞、聞其礮然、視之則石、察之則五。是月者何、僅速是月也、何以不レ日、晦日也、晦則何以不レ言レ晦、春秋不レ言レ晦也、朔有事則書、晦雖有事不レ書。曷為先言六而後言鵠。六鵠退飛記見也。視之則六、察之則鵠、徐而察之則退飛。五石六鵠何以書、記異也。外異不レ書、此何以書、為王者之後二記異也。

〔經〕三月壬申公子季友卒

〔伝〕其称季友何、賢也。何故先に隕(隕おつ)と言ひ、後に石と言うかという、隕石は聞いた事を記録したものである。ドシーンという音を聞いて行つて見たら石であり、よく調べたら五個であつた。ところが春秋経には「隕霜霜がオツ・フルの語が2見する—僖公33年隕霜不殺草、定公元年隕霜殺救。」これに公羊の「記聞」説を援用すると「ドシーン」という音を聞いて行つて見たら霜が降つていた」という事実が成立しなければならぬ事となり、公羊の記聞説は自然に崩壊せざるを得ない。しかし中国の学者で公羊の誤解を指摘したものが無いばかりか、唐の劉知幾は其の著《史通》卷六にその表現の簡約さを引用している「春秋経曰隕石于宋五、夫聞之隕、視之石、數之五、加一字大詳、減其一字大略、求諸折衷簡約会理、此為省字也」と。ここで関連する穀梁伝を引用しておかねばならない。〔經〕〔伝〕は公羊の場合と同様筆者の標出である。

春秋穀梁伝 范甯集解 僖公第五

〔經〕十有六年春王正月戊申、隕石于宋五〔劉向曰石陰類也五陽數也、象陰而陽行將隊落〕

〔云〕先隕而後石何也〔据莊七年星隕如雨先言星後言隕〕隕而後石也〔落ちた後に石であることがわかった〕于宋四竟之内曰宋〔宋国四境の内を宋と曰う〕後数散辞也耳治也〔後数は「五」を指す、隕石五個があちこちばらばらに落ちていたから散辞という。ここのところは「耳治」耳で聞いているの記録である。〕是月六鵞〔鵞退飛過宋都。先数聚辞也目治也〔先数は六を指す、六羽が集っているから聚数という、「目治」は目で見た通りの記録〕子曰石無知之物、鵞微有知之物、石無知、故日之、鵞微有知之物、故月之〔こんな処に孔子を引っ張り出してモノを言わす。ということは僕らには滑稽に見えるが、前秦時代の一部学者の常套手段らしい。石は無知の物だから日を出し、鵞は微有知の物だから月を出したのである。―ばか気た解釈〕君子之於物無所苟而已、石鵞且猶盡其辞而況於人乎。故五石六鵞之辞不設則王道不亢矣。〕

さき以後数「五」を散辞と言ったばかりなのに、ここで「五石」と言えば「六鵞」の六と同じく「先数聚辞」になってしまうではないか、何という矛盾だろう。

君子は物をもいい加減には扱わない、石や鵞についてさえも、その言葉を尽すのだから況して人に於てをやだ。だから五石六鵞について説明しないなら王道は挙げぬのである。

子曰から最後の結語王道云々まで穀梁子自身の恣意の哲学であるが、只バカバカしいと聞き流すばかりである。

劉向の陰陽説

いま見た穀梁伝の集解には劉向の陰陽説が2見する。(一)石は陰類であり五は陽数である。陰体でありながら陽行するとは、やがて墜落することを意味する。(二)鵞は陽であり六は陰である、陽体が陰行すれば必ず衰退する。

石陰鷓陽、墜落する、衰退する、などはみな劉向自身の恣意の判断として読者は誰も納得しないだろうと僕らは考えるのだが、後世の注疏家は誰もそれを批判しないらしい。やはり中国学者の伝統的通弊なのだろう。

公羊穀梁二伝を通じて感じることは、伝者自身の見解を述べるだけで「何故そうであるか」その理由も根拠も示さないことである。だから読者は誰も納得しないだろう、と僕らは思うのだが、後世の注疏がそれを批判せぬのは、後学の先学に対する礼儀なのだろうか。伝文即ち解説文に如何に矛盾が多いかは公羊穀梁に限らない。後世の注疏にもよく見られるところであり、二十世紀の今日になってもその学風は変わらないようである。因って現代中国文法学者の「無主句」に対する見解を羅列して、この論文を完結することにしよう。

一、黎錦熙《国語文法》(一九五五年12月版) 31頁：變式的主体 主体有直接倒裝在述語之下的、例如：

刮風了風が吹く。下雨了雨がふる。响雷了雷が鳴る。…(以下略)

黎氏は風、雨、雷、が主語で、いま述語―刮く、下ふる、响なるの後に来ているから「變式的主体」とするのである。すると小学生でもよく言う天下雨。海边上刮風、雲里响雷。などでは雨、風、雷が主語であろうか。若し主語というなら、天、海边、雲里、は何だろう。彼はこれらが主語でないことを立証しなければその變式主語説は成立しないのだが、彼自身一語も言及しないし、当世の学者も誰もそれを反駁又は批判しない。

二、王力《中国現代語法》上册62頁：無主句——当說話的人和對話人都知道謂語所說的是誰(或什麼)的時候、主語可以不用。…但是有時候、主語非但不是顯然可知的、而且恰恰相反、它是不可知的。咱們只純粹地叙述某一件事件、或陳說一種真理、謂語儘够用了、縱使要說出主語也無從說起、或雖可以勉強補出主語也很不自然、例如：

(A)下雨了 雨がふっている

(B) 不怕慢、只怕站 遅いのはかまわぬが、停まるのは困る

(C) 有 一个人在窗戶外面 誰かが窓の外にいるよ

(D) 是我害了他 外ならぬ私が彼をやったのです

王氏の言う通りこの4例はみな無主句であるが、各、文の構造が同じでないのだから格別に説明しないと判らないのだが、彼はそれをしない。

(A) 下雨了は春秋公羊伝の隕石石が隕霜霜がと同等の天象表現、天象は天空に起るにきまつているから、一般に主語(人)を略すというだけのこと、正しくは天北京に雨下雨了。天空以外の場処については必ず主語を標出しなければならぬ——北京北京に雨下雨了。これらは僕の形義論の分類によれば処動構造(主語が処所)だから天、北京は主語でないかと反問すれば王説は行詰る。

(C)(D)は実は形義論だけが抽出した基本文型の内で最も複雑な述述構造(兼語式)の無主形なのである。有・是(この2動詞に限られる)はもと述述句の前動詞なのだが、いま主語が略されたために復述の述述句が単述の動員句に変わり「一ヶ人」と「我」がそれぞれ主語となり、前接の「有」は主語「一ヶ人」の存在を明確にするための介詞に転じ、「是」は主語「我」を強調するための介詞に転化したものと解釈する外はない、主語「一ヶ人」「我」はもと述述句の兼語だから強勢性をもっているのである。

主語 〓 述語

(C) 有 / 一ヶ人 〓 在 〓 窗戶外面

一人の人が居る 窓の外に

(D) 是 / 我 〓 害了 〓 他

「それは」私である 私が……

誰かが居るぞ、窓の外に

(外ならぬ) 私が、彼をやったんだ(彼に損害を与えた)

(B)はあらゆる人物事を主語にとり得る句であるから、ある特定の主語を冠するとこの句の普遍性が失われ不自然な表現になってしまう。これこそ文字通りの無主句である。

三、呂叔湘《中国文法要略》(一九五六年八月) 30頁：無起詞(起詞は主語に相当) 3・3但是確有些句子里動詞是没有起詞的：

第一類是表自然現象的、如、下雨雨が、刮風風が、出太陽太陽が……(也說「天下雨」等等)城門失火、殃及池魚。……」
下雨……など自然現象の無主句を挙げたすぐ後に、一言のことわりもなくいきなり有主句「天」下雨、城門失火(城門に火事が起きる)。(2句とも処動構造)などを挙げるのは一体どういう見なのかただただ畏れ入るばかりである。

四、張志公《漢語語法常識》45頁：説話的另一种方式是籠統的説一件事或是一种情况、分不出主語和謂語這兩部分来、如：

㉞ 下雪了 ㉟ 刮風了 ㊱ 漲潮了、(汐が満ちた)。㊲ 出太陽了、不冷了 太陽が出て寒くなくなった。㊳ 失火了 火事が起きた。㊴ 要想生活、就得勞動(生活しようと思うなら働らかなければならない)。㊵ 種瓜得瓜、種豆得豆 (瓜を植えれば瓜がとれ、豆を植えれば豆がとれる)。

下雪是一种自然現象、一説下雪、我們就明白怎回事、不会問「誰下雪」事实上也没有誰在那儿下雪。所以这种句子根本不会有主語。』

下雪(雪がふる)は一つの自然現象であり、下雪と言いきえすれば、我らにはどういう事かすぐわかり「誰が雪をふらすのか」と問うことはないし、事実上「誰かがどこかに雪をふらす」ということもない、だからこういう句には始めから主語はあり得ない……』

読者はどう思いますか、張氏のこの説明を、僕はびっくりするので、その矛盾に。「下雪」は始めから主

語のあり得ない句であることを説明するのに、なぜ二度も有主句を用いるのだろうか。「誰₁下雪」と「誰₂在下雪」と。(二百頁に近い彼のこの著書のどこにも、この二句に關連する文法の説明が出ていない。

「下雪」は「春秋」に現われる。雨雪雪がふる、雨霰霰がふる、雨霰霰がふる、雨霰霰がふる、隕石石が落ち、隕霜霜しもがふると同構。語彙はちがうが語順—文法—は同じことに注意されたい。

それからもう一つ90頁『在海辺種地の人終日吹着海風(魯迅)。「人」不会吹「海風」、只能「被海風吹」也就是說、這樣一ヶ主語和這樣一ヶ動詞配搭起來、它們的關係必然是被動的。』

すると45頁の「誰下雪」は「人下雪」だから「人」不会「下雪」只能「被雪下」となり又矛盾が一つ増す。これに關連して

五、△語法講話▽ (抽印本) 26頁の例文を引いておかねばならない。

「夏天在海岸上吹風」是「讓風吹」——「夏は海岸で風が吹く」は「風に吹かれる」であり「冬天在山坡上晒太阳」。是「讓太陽晒」。——「冬は山肌に太陽が照る」は「太陽に照らされる」と。讓字が無くとも、讓字が有ると同じとは何という無法な解釈だろう。△講話▽によれば自然現象の表現はすべて被動になってしまふではないか。例如。

- (1) 天(処所) || 下雨 空は雨にふられる
- (2) 北京(処所) || 下雪 北京は雪にふられる
- (3) 誰(施事) || 下雪 誰かが雪にふられる
- (4) 海辺種地的人 || 終日吹着海風 海岸で終日で耕作する人は終日海風に吹かれる
- (5) 海岸上(処所) || 吹風 海岸は風に吹かれ
- (6) 山坡上(処所) || 晒太阳 山肌は陽に照らされ

しかし僕らの文法解釈は異なる。

(1)(2)(5)(6)は主語が処所だから、自然現象の「処動構造」に疑ない。(1)空から雨がふる(2)北京に雪がふる(5)海岸には風が吹き(6)山肌には陽がさす。

もし(5)(6)で発話者(我、我們)または話題の人(他們、又は避暑(寒)的人、などの)主語が略されていることが前後文などで明確であれば、それらの人を、主語に立て「讓」義の解釈が成り立つ。

(5)夏は「僕ら、または避暑の人」海岸で風に吹かれ、

(6)冬は「避寒的人は」山肌で陽に照らされる(山肌で日向ぼっこする)

—この場合2例とも「讓」字を必要としないことに注意。

僕の形義論文法は中国語ではぎりぎりの処、単句で9個の基本文型を抽出するのだが、そのうち処所を主語に立てる処動文は最も難解—従って重要なものだが、中国では「人」以外は主語には立て得ないもののように考えているらしく、「処動構造」は容認されそうもない。△語法講話▽が「夏天在海岸上吹風」是讓風吹。「冬天在山坡上晒太陽」是「讓太陽晒」——夏は「主語—人々は」海岸で風に吹かれ、冬は「主語—人々は」山肌で日向ぼっこする、と解説しているのはそれを示している。この本は当代第一級の文法家六人の共同執筆であることを考えると、中国語文法の体系整備は、なお前途遼遠のように思われる。

形義論 (Semantic Syntax) とするのは、僕が独自に開発した文法把握の方法なので、日本語では勿論、世界中どこの言語も採用していないのだから、この点で中国文法を批判するつもりはない、ただ中国学者は三千年来古典の解釈に「矛盾」が多いということを指摘しておくに止める。(一九八四年3月稿)

(未完)